

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1156 号	氏 名	小 嶋 俊 介
論文審査担当者	主 査 本 田 孝 行 副 査 栗 田 浩 ・ 関 島 良 樹		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>1990年代より、血小板輸血によるアレルギー反応（以下、ATR とする）を軽減する目的で洗浄血小板が調製されており、その効果は明らかである。日本では生理食塩液から始まり多くの添加液（以下、PAS とする）が使用されているが、未だに標準化され市販されている PAS がなく、M-sol と BRS-A が新たな PAS として臨床応用されている。しかし、これらの PAS を比較した報告はないため、2つの PAS による洗浄血小板について後ろ向きに比較検討した。</p> <p>治療や疾患により血小板減少を来し血小板輸血を実施した 19 歳以下の血液腫瘍小児患者を対象とした。検討期間は 5 年間であり、前半期は M-sol を用いて、後半期は BRS-A を用いて洗浄血小板を提供した。また、全期間内で非洗浄の血小板をコントロール群とした。3 群間における血小板輸血後の ATR 発症頻度、輸血前後の血算値より算出した補正血小板増加数（以下、CCI とする）、調製前後のサンプルを用いた洗浄血小板の機能や品質検査について評価した。機能および品質評価は、pH、電解質の測定、フローサイトメトリーによる CD62P 陽性率に関して評価した。</p> <p>その結果、小嶋俊介は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 洗浄血小板群における ATR 発症頻度はコントロール群と比較して有意に低下していた。2. 輸血を中止するような重篤な ATR は全く起きなかったことより、洗浄血小板が ATR の予防に大きく寄与していることが確認された。3. 洗浄血小板調製に伴い血小板回収率や血小板の短寿命化による輸血効果の低下が懸念されていたが、各 PAS における洗浄血小板の輸血効果はコントロール群と比較して同等であることが示された。4. 血小板活性化の指標である CD62P の陽性率を比較したところ、洗浄操作および異なる PAS 間における活性化は認めず、血小板機能は維持されていることが示された。 <p>これらの結果より、M-sol と BRS-A において PAS の違いによる ATR の予防効果および輸血効果への影響はないことが示された。また、多数の臨床報告がされている M-sol と比較し、BRS-A の非劣勢性について確認された。</p> <p>現在までにこの 2 つの PAS を比較した臨床報告はされておらず、過去の小児患者における洗浄血小板報告との比較もされていることより、血小板輸血による非溶血性副反応の予防に関する重要な臨床報告といえる。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			